日本語における「ハ」句と「ガ」格の統語機能について

― イタリア語の CP Layerとの対照 ―

上　野　貴　史

【キーワード】CP Layer、「ハ」句、「ガ」格、かき混ぜ、イタリア語、日本語

1．はじめに

「ハ」句と「ガ」格に関しては、久野（1973）の指摘が現在でもよく引用される。久野（1973）では、(1)と(2)で示すように、「ハ」句に［主題］と［対比］[1)] の二つの用法、「ガ」格に関しては、［排他］[2)]、［中立叙述］、「主格目的語」という三つの用法があることを指摘している。

(1)「ハ」句

a.［主題］（Thematic Topic）：太郎ハ 学生です。

b.［対比］（Contrastive Topic）：雨ハ 降っていますが、雪ハ 降っていません。

(2)「ガ」格

a.［排他］（Exhaustive Listing）：太郎ガ 学生です。

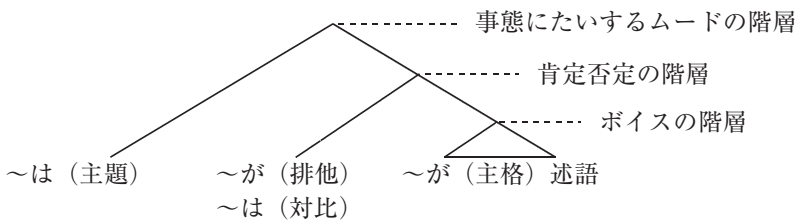
b.［中立叙述］（Neutral Description）：雨ガ 降っています。

c.［主格目的語］（Nominative Object）：僕ハ 花子ガ 好きだ。

（久野（1973: 27-28）より改変）

このような「ハ」句と「ガ」格の用法に関して、野田（1995, 1996）では、「文の階層構造」のモデルと関連づけて、それぞれの用法を(3)のように位置づけている。

(3)



（野田（1996: 287））

(3)は、生成文法の枠組みで言い換えると、［主題］の「ハ」が「語用的意味機能」である CP layer に位置し、その他の「ハ」句や「ガ」格が文の命題的意味である TP にあることを示している。

本稿では、久野（1973）で示されている用法に従って、係助詞「ハ」と格助詞「ガ」の統語機

能について精査し、かき混ぜ構文（scrambling）との関係からCP layerとTPの統語構造を考察していく。このことから、「ハ」句には、TP内とCP layerへの二種類の移動があること、そして、「ガ」格は、TPの指定部とCP layerへの二種類の移動があることを主張する。これは、結果的に、［排他］の「ガ」と［対比］の「ハ」が「肯定否定の階層」という同じ階層に位置づけられている(3)で示した野田（1996）の見解とは意を異にすることになる。この日本語におけるCP layerの精緻化を基にして、Rizzi（2004）やBenincà（2006）で指摘されているイタリア語のCP layerを日本語と比較・対照することによって、両言語における普遍性を指摘することが本稿の目的となる。

2.「ハ」句

伝統的に係助詞と呼ばれる「ハ」に関しては、おびただしい数の先行研究があり、その中で多くのことが指摘されている。この中で、久野（1973）が主張するように、「ハ」には［主題］と［対比］という異なる二つの用法があるのか、ということがよく議論となる。これは、そもそも［主題］とは何か、という問題と関係してくるように思われるが、久野（1973: 28）では、「すでに会話に登場した人物・事柄、すなわち、現在の会話の登場人物・事物リストに登録済みのものを指す名詞句」が［主題］の要素になることが指摘されている。具体的には、総称名詞句か、文脈指示の名詞句が［主題］として機能することになる[3)]。また、堀川（2012）では、［主題］に「断裂要件」と「意味要件」という二つの条件を設定している。「断裂要件」とは、「言語の線条性を積極的に活用し、表現上の立場が明確に異なる前後両項の結語として語る表現スタイルをとる際の前提基盤部分」（堀川（2012: 5））であり、表現上の立場として前後に大きな断裂を含むものである。そして、「意味要件」としては、尾上（1995: 31）の「題目[4)]が「説明対象」であり、後続の伝達主要部がそれに対する「説明内容」」という指摘に従って、形容詞文と動詞文に分け、(4)のような「意味要件」を主張している。

(4) a. 形容詞文：「モノーあり様」
　　b. 動詞文　：「モノー在り方」（堀川（2012: 36））

これら尾上（1995）や堀川（2012）で示された「ハ」に関する立場は、久野（1973）とは異なり、「ハ」という一つの助詞に、［主題］と［対比］というようにきれいに分かれる用法があるのではなく、文脈に応じた条件の適応の有無によって、それぞれの意味機能として解釈されるというものである。本稿では、一つの「意味要件」を持つ「ハ」句が統語機能の違いにより［主題］と［対比］という解釈が生じることを主張していく。この際、堀川（2012）が指摘している「主題には断裂要件がある」という点と、(5)のように、「ハ」は主格・対格といった構造格と共起できないという点に着目して分析を進めていく。

(5) a. 田中君＊（が）は昨日中国から帰国した。

b. この絵＊（を）は五歳の娘が描いた。

c. 会場（で）は余興が始まっている。

d. この宝くじ売り場（から）は、先日、１等の当たりくじが出た。

（堀川（2012: 33）より改変）

(5)では、a や b のように構造格を残した「ガハ」「ヲハ」は非文法的となるが、c や d のような内在格を残した「デハ」「カラハ」は文法的であり、むしろ、「デ、カラ」といった内在格がある方が自然に感じられる。

2.1. ［主題］と［対比］

［主題］が「断裂要件」を含むということに関しては、久野（1973）で示されている(6)の「主題化」の規則との関連性が認められる。

(6) 主題化：文中の「名詞句＋助詞」に「ハ」を附して文頭に移動せよ。　（久野（1973: 41））

この久野（1973）の規則は、係助詞「ハ」が TP 内で付与され、［主題］解釈の場合、文頭に移動するというように理解できる。別の言い方をすれば、文頭に移動しない場合、「ハ」がもう一つの解釈である［対比］になるとも言える。このように、「ハ」を付与し、文頭に移動するということが、「断裂」が生じる要因となると考えられる。

一方、このような移動操作を想定しないものとして、(7)のような構造格の主題化の例を挙げ、「主題のハ句については、[Spec, TP］に基底生成される」（青柳（2010: 204））という主張がある。

(7) そのピザハ 太郎が 食べた。

この「ハ」句が基底生成されるという考え方で、(7)の文の構造を示すと(8)のようになる。

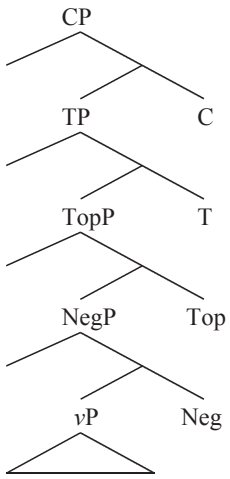
(8) ［$_{TP}$ そのピザ$_i$ ハ ［$_{vP}$ 太郎が ［$_{VP}$ *pro*$_i$ 食べた］］］（青柳（2010: 205））

(8)は、「そのピザハ」という名詞句が TP の指定部に基底生成される構造を示したものである。しかし、このような［主題］の「ハ」句が基底生成されるとする考えでは、十分な「断裂要件」が生じないと思われる。また、青柳（2010）では、VP で付与される「ヲ」格の消失と、「ハ」がどの様に付与されるかについて十分な説明がなされていない。そこで、本稿では、久野（1973）の主題化規則に従い、TP 内で「ハ」が付与され、［主題］解釈の場合、「ハ」句は文頭に移動するという立場を取ることにする。ここで、問題となるのが TP 内のどこで「ハ」が付与されるかということである。このことに関して、Jayaseelan（2001）は、TP 内部の TopP/FocP という仮説を提示している。これは、マレー語、ドイツ語、オランダ語、イディシュ語の例から、*v*P の上に TopP/FocP などの機能投射を設定しているものである[5)]。日本語においても、とりたて詞のマーカーを付与する TopP が、*v*P の上に存在すると仮定することは有効であると思われる。

2.2.「ハ」の付与

とりたて詞は、文末の陳述に関係する範疇と定義づけることが可能であると思われるが、「ハ」がとりたて詞であるかどうかということについては、野田(1996)の指摘が参考になる。野田(1996: 284）では、[主題］の「ハ」が「事実を表すムードなど信義が判断できる」陳述と呼応し、[対比］の「ハ」が「肯定否定」の陳述と対応するということを指摘している。また、寺村（1981: 55）では、「係助詞のハ、モ、コソや、先のダケやシカや、そのほかマデ、サエ、バカリといった種類の助詞の役割は、… それの付着する構文要素を際立たせ、そのことによって自分のコトに対する見方を相手に示そうとするところにある。「際だたせる」ということはそれを受けとる聞き手の心の中に呼び起こされる、何らかのほかのモノあるいはコトと「対比させる」ということにほかならない」とし、係助詞「ハ」を含めたこれらの助詞を取立て助詞とし、［対比］という機能があることを指摘している。このことは、［対比］解釈の「ハ」が他のとりたて詞と統語的にも大きく関係していることを示唆しているものである。このようなことから、「ハ」がとりたて詞の一つであると仮定し、このとりたて詞の付与に関係する TopP を TP の直後に位置するものとして示した統語構造が(9)となる。

(9)



(9)の TopP が TP 内にあり、これが「ハ」を付与すると考えると、久野（1973）の「主題化」の指摘と合致することになる。

ここで、(5a/b）で示した、「ハ」が付与されると「ガ／ヲ」という構造格が脱落したように見えるものに関して考えてみる。これらは、「ガ／ヲ」という構造格が明示的に示されていないが、(5a)の「田名君は」がこの文の主語であり、(5b)の「この絵は」が目的語であることは、日本語話者であれば容易に理解できる。このような格助詞に関して、金水（1993: 195）は、「格助詞の脱落現象は、古典語においてより広範囲に現れる。これはもともと存在した格助詞が脱落したのではなく、無助詞の名詞句がそのままで項として解釈される」と、古典語から格助詞が脱落し

た無助詞名詞句が存在していたことを指摘しているが、これと同じ現象が「ハ」の付与の時にも起こっていると考えられる。これは、まず、(10)の「格フィルター」が前提となる。

（10）*NP if NP has phonetic content and has no Case　（Chomsky（1981: 49））

つまり、音形のある名詞句は抽象格（Case）を持たなければならないということであるが、この抽象格と音形のある形態格（case）に関して、Kuroda（1988: 136）では、「抽象格と形態格（格助詞）は全く別のシステム」であるという可能性を元に、“Principle of morphological licensing: Arguments must be licensed by Case or case.”という原理を指摘している。これは、抽象格か形態格のいずれかがあれば項は認可されるということを主張しているものである。このような抽象格または形態格による項の認可から、「ハ」が付与される場合、「ガ／ヲ」という構造格が脱落しているのではなく、抽象格によってその名詞句が認可されて、それに「ハ」が付加しているものと考えることができると思われる。つまり、構造格の場合、抽象格によって項の認可が行われ、その後、TopP の「ハ」または、形態格の「ガ」が付与されると考えられる。この格付与を示したものが(11)である。

（11）a. [$_{TP}$ [$_{T[EPP]}$ [$_{vP}$ 田中君$_{[Case]}$ が [$_{VP}$ 昨日中国から帰国した]]]]

b. [$_{TP}$ [$_{T[EPP]}$ [$_{Top[wa]}$ [$_{vP}$ 田中君$_{[Case]}$ ハ [$_{VP}$ 昨日中国から帰国した]]]]]

(11a)は、[EPP] 素性により主格の抽象格（点線）が付与された後、同じく [EPP] 素性により「ガ」という形態格（実線）が付与されることを示している。また、(11b)では、(11a)と同じく [EPP] 素性により主格の抽象格が付与された後、(11a)とは異なり TopP の主要部より「ハ」が付与されていることを示している。

意味役割の付与と連動する内在格の場合は、「デ／カラ」という後置詞が NP の認可子となるため、内在格が付与された後に「ハ」が付与されると考える方が自然である。

（12）会場でハ [$_{TP}$ [$_{Top[wa]}$ [$_{vP}$ 余興が [$_{PP}$ ~~会場 で ハ~~] 始まっている

(12) は、PP において後置詞「デ」が認可子となって「会場で」という意味役割が付与され、TP 内の Top により「ハ」が付与された後、TP の左に移動していることを示している。内在格「デ」がない「会場ハ」が容認されることについては、内在格の場合、認可子である後置詞が格を付与する前に「ハ」が付与されることを許すためと思われる。

（13）会場ハ [$_{TP}$ [$_{Top[wa]}$ [$_{vP}$ 余興が [$_{NP}$ ~~会場 ハ~~] 始まっている

このようなことから、「ハ」の付与に対して、(14)の規則が設定できる。

（14）「ハ」付与：TP 内の TopP の主要部 Top$_{[wa]}$ により、「名詞句＋(助詞)」に「ハ」を付与せよ。

2.3.「ハ」句の移動と解釈

「ハ」句の移動に関して、Miyagawa（1997: 10）では、“there is a focus position between the subject and the VP”とし、この位置に［対比］解釈の「ハ」句が移動することを主張している。

（15）a. ?? ジョンが［$_{vP}$ 急いで 本は 買った］[6)]

b. ジョンが 本は$_i$［$_{vP}$ 急いで t_i 買った］（Miyagawa（1997: 10）より改変）

(15)は、*v*P 内の基底生成位置に「本は」を置くと a のように容認度が下がるが、主語と *v*P の間に「本は」を移動させると b のように文法的となるということを示している。本稿では、この主語と *v*P の間に TopP という機能投射を設定しているので、［対比］の「ハ」句はこの TopP に移動するものと考える[7)]。従って、「田中君ハ」が［対比］と解釈される（11b）の構造は、(16)のようになる。

（16）［$_{TP}$［$_{TopP}$ 田中君ハ$_i$［$_{vP}$ t_i［$_{VP}$ 昨日中国から帰国した］］］］

このように「ハ」を付与された要素は、義務的に TP 内の TopP へ移動し、［対比］の解釈を得る。これに対して、「ハ」句が［主題］解釈となるためには、文頭に移動する必要がある。例えば、(12)の「会場でハ」は、文頭である CP layer の TopP に移動していると考えられる。

（17）［$_{CP}$［$_{TopP}$ 会場でハ$_i$［$_{TP}$［$_{vP}$ 余興が［$_{VP}$ t_i 始まっている］］］］］

主語の「ガ」格が TP の指定部に留まると仮定すると、(17)の「会場でハ」という「ハ」句は、TP の外に移動することになる。このように、［主題］解釈の「ハ」句が CP layer に移動して主題化されることにより、堀川（2012）が指摘する「表現上の立場として前後に大きな断裂を含む」という「断裂要件」を生み、「トピック－コメント」構造を形成するものと考えられる。

次に、(18)のような「ハ」句が二つ以上並ぶ文を考えてみる。

（18）そのピザハ 太郎ハ 食べた。

久野（1973）が主張しているように、「ハ」句が二つ以上並ぶ場合、最初の「ハ」句だけが［主題］解釈となり、他のものは［対比］解釈となる。これは、最初の「ハ」句が必ず［主題］解釈になるというものではなく、［対比］が連続することも許容することを意味する。最初の「ハ」句が［主題］解釈とした構造を記述したものが(19a)であり、［対比］解釈としたものが(19b)となる。

（19）a.［$_{CP}$［$_{TopP}$ そのピザハ$_i$［$_{TP}$［$_{TopP}$ 太郎ハ$_j$［$_{vP}$ t_j［$_{VP}$ t_i 食べた］］］］

b.［$_{TP}$［$_{TopP1}$ そのピザハ$_i$［$_{TopP2}$ 太郎ハ$_j$［$_{vP}$ t_j［$_{VP}$ t_i 食べた］］］］

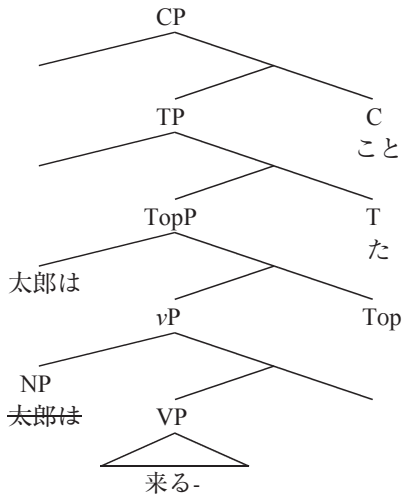
(19)のような統語構造の違いから、最初の「ハ」句の解釈の二重性が生まれるものと考えられる。

この「ハ」句の解釈の違いが移動する場所に起因するということは、補文標識のある従属節内において、［主題］解釈の「ハ」が中和されて「ガ」となることや[8)]、従属節内にある「ハ」が［対比］として解釈されることからも理解できる。補文標識内の［主題］が「ガ」によって中和されるということは、［主題］解釈の「ハ」が補文標識より上に位置するためであると考えられる。つまり、［主題］解釈になりたくても、補文標識を越えることができないために中和するという

ことになる。このため、従属節内にある「ハ」は、必然的に［対比］解釈しか得られなくなる。例えば、(20)は、(21)のような構造から派生していると考えられる。

(20)［太郎ハ 来た（が 花子ハ 来なかった）］こと　（久野（1973: 33））

(21)



以上のことから、「ハ」の統語機能に関して、(22)のような規則が設定可能となる。

(22) a.［対比］解釈：TP 内で付与された「名詞句＋(助詞)＋ハ」を TP 内の TopP に移動せよ

b.［主題］解釈：TP 内で付与された「名詞句＋(助詞)＋ハ」を CP layer の TopP に移動せよ。

つまり、日本語の「ハ」句は、(14)の「ハ句付与」の規則が適用され、TP 内の TopP へ移動すると［対比］解釈となり、CP layer の TopP へ移動すると［主題］解釈となる。このように、「ハ」句はいずれにせよ移動を生じることによりそれぞれの機能を保有するということが指摘できると思われる。

3.「ガ」格

3.1.［排他］と［中立叙述］

久野（1973: 32）によると、日本語の「ガ」格には、［排他］と［中立叙述］の二種類の機能があるとされ、「述部が恒常的状態・習慣的動作を表す場合には、総記の解釈しか受け得ない」としている。例えば、(23)のような文は、［排他］と解釈される。

(23) 太郎ガ 学生です。(「(今話題になっている人物の中では）太郎だけが学生です」)

（久野（1973: 28））

一方、「述部が動作・存在・一時的状態を表わす場合、「ガ」は、総記と中立叙述の二義をとり得る」（久野（1973: 33））としている。例えば、(24a)の［中立叙述］解釈における「太郎ガ」は、

いわゆる普通の主格を表しているのに対して、(24b)の［排他］解釈は、焦点にあたる疑問詞に対応して、他でもなく「太郎ガ」という焦点解釈を受ける。

（24）a. 太郎ガ 死んだ。［中立叙述］

b. 誰ガ 死んだか[9]。太郎ガ 死んだ。［排他］（久野（1973: 33））

主格の「ガ」格の付与に関して、三原（2006: 39）では、「TP の主要部 T は EPP（Extended Projection Principle）素性を持つ。この素性を具有する主要部は、その指定部（Spec（ifier））に統語範疇に関する D 素性を持つ範疇（DP）を要求」するとし、節は主語を持たなければならないということと、この［EPP］素性により「ガ」格が付与されることを示している。

ここで、「ガ」格が複数出現する多重主格構文（Multiple Nominative Construction）について考えてみる。久野（1973）においては、（25）のように、この主語化は「名詞句＋ノ」を「名詞句＋ガ」に変えるという規則で処理しているが、これに適応しない文は他の研究において多く指摘されている[10]。

（25）主語化：文頭の「名詞句＋ノ」を「名詞句＋ガ」に変えて、その文の新しい主語とせよ。

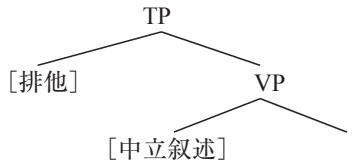
（久野（1973: 41））

一方、三原（2006）では、(26)のような多重主格構文に関して、「息子ガ」が通常の主語に付与される［中立叙述］解釈であるのに対して、「田中さんガ」は、「X がそして X だけが」という焦点解釈を受ける［排他］解釈になるとしている。

（26）田中さんガ、息子ガ 家出したそうですよ。　（三原（2006: 44））

この構造を簡略化して示したものが(27)である。

（27）「ガ」格



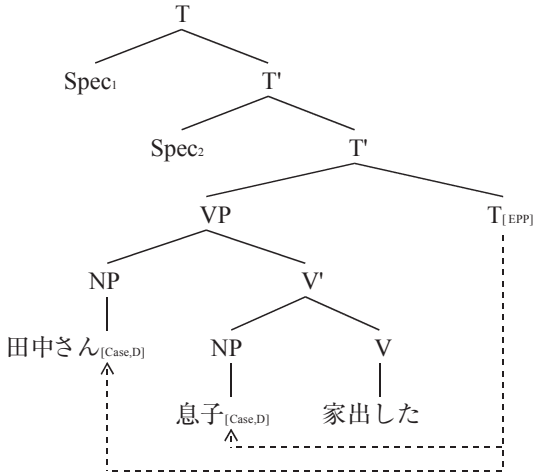
この多重主格構文の派生に関して、三原（2006: 45）では、［排他］解釈の「ガ」を最初から TP の外指定部（Outer Spec）に基底生成させ、［中立叙述］解釈になる「ガ」を内指定部（Inner Spec）に移動させるという考え方を主張している。(26）の文をこの構造で示すと（28）のようになる。

（28）［$_{TP}$ 田中さんガ［$_{T'}$ 息子ガ$_i$［$_{VP}$［$_{DP}$ t$_i$［$_V$ 家出したそうですよ］］］］］

このような［排他］解釈の「ガ」格を基底生成させることは、青柳（2010）の［主題］の「ハ」を基底生成させることと通じるところがあるように思われるが、一つの「ガ」格が一方は、基底生成され、他方が［EPP］素性により付与されるということは説得力に欠けると思われる。これに対して、Takano（2003）では、（29）の T による「多重一致」（Multiple Agree）という考え

方で「ガ」格の派生を説明している。

（29）多重一致



（三原（2006: 44））

(29)において「家出する」という動詞 V は、自動詞であるので「息子」や「田中さん」に格を付与できない。このため、TP の主要部である T の［EPP］素性により、多重に「ガ」格がそれぞれに付与されると考えるのである。このような、T による一定した「ガ」格付与は、十分に説得力のあるものである。しかし、Takano（2003）では、「ガ」格が付与された［排他］解釈が外指定部 $Spec_1$ へ、そして［中立叙述］解釈が内指定部 $Spec_2$ へ移動するとしている。やはり、いずれの「ガ」格も TP 内に留まるという指摘である。しかし、前述したように、［排他］解釈の「ガ」格は、Focus 的な機能を持つのであるが、この機能付与が TP 内で起こるという考えには疑問が残る。そこで、この［排他］解釈の「ガ」格の生起位置について、(30)の文から分析を試みることにする。

（30）このバットのほうガ ホームランが 打てる。　（野田（1996: 15））

野田（1996）も指摘しているように、(30)の［排他］解釈の「このバットのほうガ」は、「このバットで」という「デ」格で言い換えられるように、決して主格の「ガ」ではない[11)]。このように、［排他］解釈の「ガ」は、単純な主格を示すものではなく、「他ではなくコレ」といったような Focus 機能を表すものであると考えられる。このため、「他ではなくダレ」という場合には、(24b)のように「誰ガ」というように疑問詞が焦点化し、その答えも「他ではなく太郎ガ」というように、［排他］解釈の「ガ」が用いられる。このことを考えると、［排他」解釈の「ガ」は、［主題］解釈の［ハ］句と同じように、TP 内ではなく CP layer に位置するものと考えられる。このようなことから、(26)のような多重主格構文においては、［排他］解釈の「田中さんガ」が CP layer の FocP へ、そして「息子ガ」が TP の指定部へ移動すると考える方が自然であると思われる。

(31)［$_{CP}$［$_{FocP}$ 田中さんガ$_i$［$_{TP}$ 息子ガ$_j$［$_{vP}$ t_i［$_{VP}$ t_i 家出したそうですよ］］］］］

［中立叙述］解釈と［排他］解釈の「ガ」格をまとめると(32)のようになる。

(32)「ガ」格

［EPP］素性により「ガ」格が付与された後、CP layer の FocP に移動するものが［排他］の解釈を受け、TP の指定部に移動するものが［中立叙述］解釈となる。

これは、久野（1973: 41）の「総記」のマーキングである(33)にも合致したものとなっている。

(33)［総記］のマーキング：文の述部が状態又は普遍的・習慣的動作を表し、文頭の「名詞句＋ガ」に数詞、数量詞が含まれていない場合には、その名詞句に［＋総記］のマークを附せ（久野（1973: 41））

このように、［中立叙述］解釈と［排他］解釈の「ガ」格は、同じようなシステムで付与された後、移動する統語的な位置により、異なる解釈が得られるものと考えられる。

3.2.［主格目的語］

もう一つの「ガ」格は、［主格目的語］（Nominative Object）として用いられるものである。三原（2006）では、(34)と(35)のような状態述語文が主格目的語の「ガ」格を取るとしている。

(34) 単純形

a. 能力を表す形容詞・形容動詞：上手、苦手、下手、得意、うまい

b. 内部感情を表す形容詞・形容動詞：好き、嫌い、欲しい、怖い

c. 可能を表す動詞：できる、分かる

d. 所有・必要を表す動詞：ある、要る

e. 自意志によらない感覚動詞：見える、聞こえる

(35) 複合形

a. 動詞＋たい

b. 動詞＋可能を表す「れる」「られる」

c. 動詞＋難易を表す「難い」「易い」（三原（2006: 180））

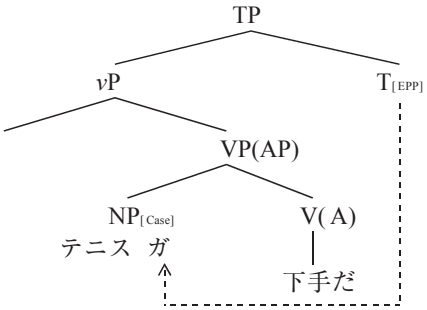
単純形・複合形を含めて主語目的格構文を作る述語は自動詞であり、なおかつ非対格自動詞と位置づけることができる。ただし、単純形が複合形と大きく異なるのは、単純形が(36a)のように「が／を」の交替を許さないのに対して、複合形が(36b)のように「が／を」の交替を許すことにある。

(36) a. 田中君がテニス｛が／*を｝下手だ。

b. 僕があの CD｛が／を｝買いたい。

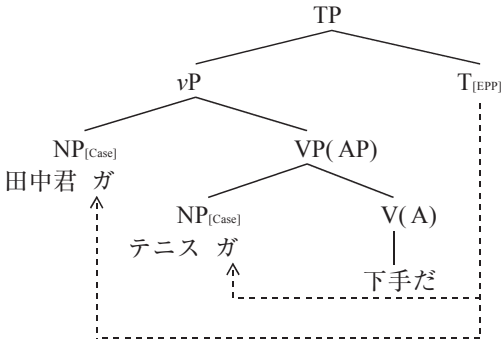
まず、単純形であるが、(36a)の「下手だ」という述語は非対格述語であるため、対格である「ヲ」格を「テニス」に付与できない。従って、この NP「テニス」は、TP の主要部である T の［EPP］素性により、「ガ」格が付与されることになる。これを示したものが(37)である。

(37)



さらに、「田中君」も［EPP］素性により多重一致で「ガ」格が付与される。これを示したものが(38)となる。

(38)



この場合の「田中君ガ」は、［排他］の意味に解釈されるため、FocP へ移動し、非対格名詞句「テニスガ」は［中立叙述］に解釈され、TP の指定部へ移動する。これを示したものが(39)となる。

(39)［$_{CP}$［$_{FocP}$ 田中君ガ $_i$［$_{TP}$［$_{Spec}$ テニスガ $_j$［$_{vP}$ t$_i$［VP t$_j$ 下手だ］［$_T$ ］］］］］］

次に、形態論的に＜「非状態動詞」+「状態述語接辞」＞という構造を持つ複合形についてであるが、この複合形の「ガ」と「ヲ」の交替については、Takano（2003）の予期的分析（Prolepsis Analysis）に概ね従うことにする。つまり、「ヲ」格を付与されている「あの CD ヲ」という場合は、(40)のような「非状態動詞」である「買う」から対格を付与されて派生していると考える。

(40)［$_{VP}$［$_{vP}$［$_{VP}$［$_{NP}$ あの CD ヲ］［$_V$ 買う -］］］［$_A$ たい］］

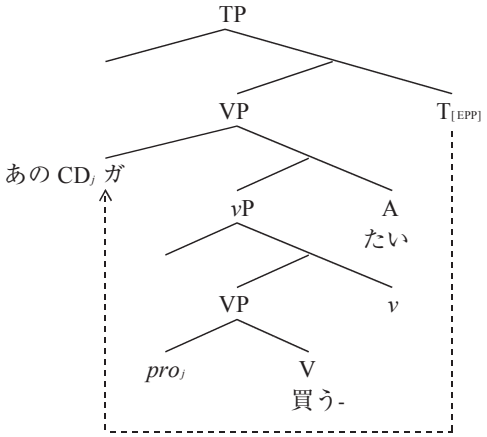
一方、「ガ」格が付与されている(36b)の「あの CD ガ」という場合は、Takano（2003）では、「状態述語接辞」の上の VP に基底生成されるということが主張されている。しかし、「状態述語接辞」の上の VP に予期的分析で「ガ」格が位置することは理解できるが、基底生成ということに関しては、異論を唱えたい。例えば、この「ガ」格を［対比］解釈となる(41)のような「ハ」句とした場合について考えてみる。

(41) あの CD ハ 買いたい

もし、「ガ」格が基底生成されるならば、「あの CD ガ」と基底生成された「ガ」格を脱落させて、「あの CD ハ」と「ハ」を付与する別の規則が必要となる。このことから、本稿では、(41)

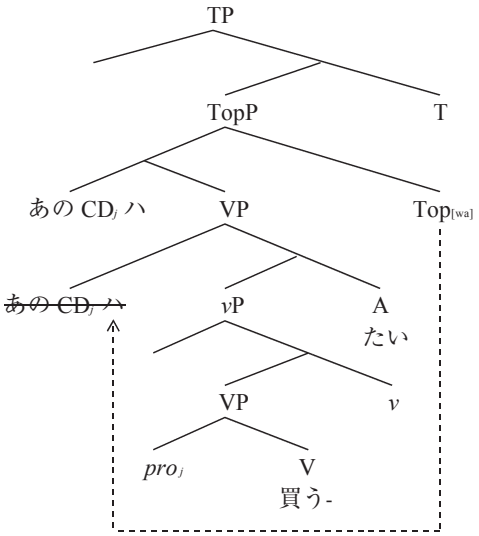
のような文を出現させるために、「ガ」格は基底生成されるのではなく、［EPP］素性により付与されると考えることにする。これにより、「ハ」句を生成する場合、［EPP］素性より先に TopP で「ハ」が付与される(41)のような文が派生し、「ハ」句を生成しない場合は、［EPP］素性により「ガ」格が付与されると考えることができる。この「ガ」格の派生は、(42)のような構造として記述することが可能であると思われる。

(42)



一方、［対比］解釈の「ハ」が付与される場合は、(43)で示すように、TP 内の TopP より「ハ」が付与され、TopP へ移動すると考えられる。

(43)



以上のことから、［主格目的語］である「ガ」格に関しては、単純形の述語全体と複合形の「状態述語接辞」が非対格述語となるため、この述語から「ヲ」格を付与されることが不可能なため、T の［EPP］素性より「ガ」格が付与されて派生していることが指摘できる。

4．かき混ぜ構文

かき混ぜ構文（Scrambling）で文頭に移動する要素は、一般的に Focus の意味機能を持つ。ここで言う Focus とは、「発話時において聞き手の知識の蓄積（the hearer's knowledge-store）に新たに寄与する（と話し手が考える）情報を担う部分。ふつう（イントネーションや強勢などによって）韻律的に卓立している」（青柳（2010: 197））と規定する。

（44）この本を 太郎が 読んだ。

(44)における文頭に移動している「この本を」というのは、VP 内で「ヲ」格を付与された後、CP layer の FocP に移動するものと考えられる。この構造を示したものが(45)となる。

（45）$[_{CP}$ $[_{FocP}$ この本を $_i$ $[_{TP}$ $[_{vP}$ 太郎が $[_{VP}$ t_i 読んだ$]]]]]$

このような CP layer の FocP は、（46）のように、複数回生起することが可能である。

（46）$[_{CP}$ $[_{FocP1}$ 花子に $_i$ $[_{FocP2}$ この本を $_j$ $[_{TP}$ $[_{vP}$ 太郎が $[_{VP}$ t_i t_j あげた$]]]]]]$

ここで、［主題］解釈の「ハ」句が出現する TopP と、「かき混ぜ」により移動した FocP の生起位置を考察するために(47)の文を考えてみる。

（47）この本を 太郎ハ 読んだ。

(47)における「太郎ハ」は、［主題］ではなく［対比］としか解釈できない。［対比］解釈の「ハ」が CP layer に移動するのではなく、TP 内に留まるということを考えると、この構造は(48)のように記述できる。

（48）$[_{CP}$ $[_{FocP}$ この本を $_j$ $[_{TP}$ $[_{TopP}$ 太郎ハ $_i$ $[_{vP}$ t_i $[_{VP}$ t_j 読んだ$]]]]]]$

このように、FocP より右の「ハ」句は、［対比］解釈となる。次に、「ハ」句が［主題］とも［対比］とも解釈される(49)を考えてみる。

（49）そのピザハ、生協で、太郎が食べた

［対比］と解釈される場合の構造は(50)のように示すことができる。

（50）$[_{CP}$ $[_{FocP1}$ そのピザハ $_j$ $[_{FocP1}$ 生協で $_i$ $[_{TP}$ $[_{TopP}$ t_j $[_{vP}$ 太郎が $[_{VP}$ t_i t_j 食べた$]]]]]]$

(50)の場合、「ハ」句である「そのピザハ」は、TP 内の TopP より「ハ」が付与され、TP 内の TopP へ移動し、［対比］解釈を得る。さらに、「かき混ぜ」により CP layer の $FocP_1$へ移動する。同時に、「生協で」も「かき混ぜ」により $FocP_2$へ移動していることを示している。これに対して、「そのピザハ」が［主題］解釈となる場合は、(51)のよう示すとができる。

（51）$[_{CP}$ $[_{TopP}$ そのピザハ $_j$ $[_{FocP}$ 生協で $_i$ $[_{TP}$ $[_{vP}$ 太郎が $[_{VP}$ t_i t_j 食べた$]]]]]]$

(51)のように、［主題］解釈となる「ハ」句は、CP layer の左端である TopP に移動し、「かき混ぜ」により移動した「生協で」は、TopP の後の FocP へ移動する。このように、日本語の CP layer は、［主題］解釈の「ハ」句が左端に出現し、その後に FocP という順序で出現する。そして、これまでの考察から、TopP は一つだけ、FocP は複数個出現できるということが指摘

できると思われる。これは、(52)の「そのピザハ」が［主題］ではなく［対比］の解釈しかされ得ないことからも理解できる。

(52) 生協で、そのピザハ、太郎が食べた

(52)は、「生協で」という Focus の後に「そのピザハ」という「ハ」句が出現しているため、「そのピザハ」は、［対比］解釈としかならないということになる。

ここで、動詞に［対比］解釈の「ハ」が付与されている(53)について考えてみる。

(53) 太郎が ピザを 食べてハ いました。　（青柳（2010: 215））

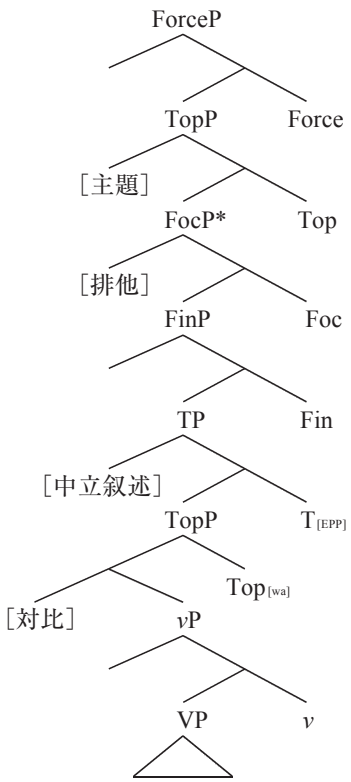
本稿では、［対比］解釈の「ハ」は、TP 内の TopP に移動すると考えるため、(53)における「太郎が」と「ピザを」は「かき混ぜ」により、CP に移動している(54)の構造から派生していると考える。

(54) $[_{CP}$ $[_{FocP1}$ 太郎が$_i$ $[_{FocP2}$ ピザを$_j$ $[_{TP}$ $[_{TopP}$ 食べては$_k$ $[_{vP}$ t_i $[_{VP}$ t_j t_k]]]$[_T$ いました]]]]]

以上のように、「かき混ぜ」により移動した要素の分析から、日本語の CP layer の構造は、＜単一の TopP ＋複数の FocP ＞となることが指摘できる。

5．日本語とイタリア語の CP Layer

(55)



これまで、「ハ」句と「ガ」格の出現位置を統語機能という観点から分析を行った。これに基づき、日本語の CP layer を Rizzi(2004)[12] のものを援用して示すと(55)のようになる。(55)は、CP 部分として、［主題］解釈である TopP が最も左端にあり、その後に繰り返し可能な FocP が続き、TP 内に［対比］解釈の「ハ」を付与する TopP があることを示している。CP layer に注目すると、イタリア語と共通している点は、Topic → Focus という順序である。この左端の Topic に関して、Rizzi(2004)では、無数の Topic が唯一の Focus の前後に出現すると指摘しているが、この Topic と Focus について、Benincà（2006）では、さらに詳細に(56)のような分析を行っている。

(56) $\{_{\text{Frame}}$ ...[HT]...$\}\{_{\text{Topic}}$ ...[LD]... $\}\{_{\text{Focus}}$ ...[EmphFocus]...[UnmFocus]...$\}$

（Benincà（2006: 58））

Benincà（2006）では、Rizzi（2004）の左端にある TopP を Hanging Topic（HT）が生起する FrameP と、Left Dislocation（LD）のある TopicP に分け、それぞれ(57)のような特徴があることを指摘している。

(57) a. LD は項全体が左に出現するが、HT は DP のみ

i ）Di Mario/di questo libro, non（ne）parla più nessuno.（LD）

ii ）Mario/questo libro, non ne parla più nessuno.（HT）

b. LD は直接目的語・部分目的語の時のみ繰り返しの代名詞を必要とする。HT は必ず繰り返しの代名詞を必要とする

i ）Mario, *(lo) vedo domani.（LD）

ii ）Mario, nessuno parla più di lui/ ne parla più.（HT）

c. HT は一つだが、LD はそれ以上可能

i ）*Mario, questo libro, non ne hanno parlato a lui.（HT）

ii ）A Gianni, di questo libro, non gliene hanno mai parlato.（LD）

d. HT は LD と共起する。HT-LD の順序

i ）Giorgio, ai nostri amici, non parlo mai di lui.（HT-LD）

ii ）*Ai nostri amici, Giorgio, non parlo mai di lui.（LD-HT）　（Benincà（2006: 56-57））

この FrameP にある HT は、「名詞句のみ」、「ただ一つ」、「LD より前」に出現するという点で、日本語の［主題］解釈の「ハ」句と同じ特徴を示す。日本語の［主題］解釈となる「ハ」句も基本的に、名詞句が［主題］となり、一文で一つしか出現せず、他の「ハ」句よりも左に出現する。このことから、Benincà（2006）で示された CP layer の左端にある FrameP の HT は、日本語の主題化された「ハ」句と等価の要素と考えて良さそうである。これとは異なり、TopP の LD は、「項全体に」、「複数」、「HT の後」に出現するという点で、［対比］解釈の「ハ」句と類似する。イタリア語の LD と日本語の［対比］解釈の「ハ」句が大きく異なるのは、日本語の「ハ」句が

CP layer に移動せず、TP 内に留まるということである。これは、日本語が助詞という関係を表すマーカーの「ハ」で明示的に［対比］解釈を示すのに対して、イタリア語では移動という、位置によってしか Topic を示せないためであると考えられる。

6．結語

以上、日本語の「ハ」句と「ガ」格の統語位置を統語機能面から改めて検討し、イタリア語の CP layer との比較を行った。

日本語の「ハ」句、「ガ」格、かき混ぜ構文について、本稿で指摘したことを以下にまとめてみる。

(58) a.「ハ」

ⅰ)「ハ」付与：TP 内の TopP の主要部 Top [wa] により、「名詞句＋（助詞）」に「ハ」を付与せよ。

ⅱ)［対比］解釈：TP 内で付与された「名詞句＋(助詞)＋ハ」を TP 内の TopP に移動せよ。

ⅲ)［主題］解釈：TP 内で付与された「名詞句＋(助詞)＋ハ」を CP layer の TopP に移動せよ。

b.「ガ」

ⅰ)「ガ」付与：[EPP] 素性により「ガ」格を付与せよ。

ⅱ)［排他］解釈：[EPP] 素性により付与された「ガ」を CP layer の FocP に移動せよ。

ⅲ)［中立叙述］解釈：[EPP] 素性により付与された「ガ」を TP の指定部に移動せよ。

ⅳ)［主格目的語］：単純形の述語全体と複合形の「状態述語接辞」は非対格述語であり、この述語から「ヲ」格を付与されることが不可能なため、T の [EPP] 素性より「ガ」格が付与される。

c. かき混ぜ構文

ⅰ)「かき混ぜ」により文頭に移動した要素は、CP layer の FocP に移動する。

また、日本語とイタリア語の CP layer に関して、次のことが指摘できる。

(59) a. 両言語とも、CP layer において、TopP → FocP の順序で生起する。

b. 日本語の［主題］解釈の「ハ」は、イタリア語における FrameP の HT と同じ性質を持つ。

c. 日本語の［対比］解釈の「ハ」は、イタリア語における TopP の LD と、移動の有無を除いて、同じ性質を持つ。

d. CP layer の左端が単独の Thematic Topic で占められ、その後に複数の Focus が出現するということに普遍性が見出されるが、助詞という不変化詞で文法関係を示す日本

語と、格を消失したイタリア語では、Contrastive Topic を示す場合、「マーカー」と「移動」というパラメターが存在する[13)]。

付記　本稿は、2017年9月2日、広島市立大学で開催された第47回西日本言語学会において、「日本語における「ハ」句と「ガ」格の統語機能について：イタリア語の CP Layer との対照」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

註

1）久野（1973）では、「対照」という用語が用いられているが、本稿ではこれを［対比］としている。
2）久野（1973）では、「総記」という用語が用いられているが、本稿では［排他］として扱うことにする。
3）つまり、［主題］解釈になるのは、定名詞句となる。
4）「題目」という用語は、本稿の［主題］に相当する。
5）Poletto（2006）では、古イタリア語において TP 内 TopP を設定している。
6）様態副詞表現「急いで」は、*v*P 付加位置を占める。
7）この位置は、Miyagawa（1997）の "focus position" に相当する。また、富岡（2010）では、［対比］解釈の「ハ」は、Focus のプロソディーと同じであるという韻律的な特徴も指摘されているため、この TP 内の TopP は Focus 的な要素もあると思われる。
8）いわゆる三上（1972）の「無題化」のこと。
9）日本語の *wh* 句は、TP 内に留まる。
10）例えば小泉（2007: 106）では、「カキ料理ハ 広島が 本場だ」が「? カキ料理ノ 広島が 本場だ」を基底文として派生しているとは考えにくいことを指摘している。
11）「ホームランガ」の「ガ」は、次節で扱う［主語目的語］の「ガ」である。
12）Rizzi（2004: 242）で示されている［Force　Top*　Int　Top　Focus　Mod*　Top*　Fin　IP］をモデルとしている。
13）格は消失しているが、古イタリア語においては、TP 内に内部 TopP が多く出現する。詳細については、拙稿（2017b）を参照。

参考文献

Belletti, Adriana & Luigi Rizzi（1988）"Psych-Verbs and Theta-Theory," *Natural Language and Linguistic Theory 6-3*, 291-352.

Benincà, Paola（2001）"The Position of Topic and Focus in the Left Periphery," in G. Cinque &

G. Salvi (eds.) *Current Studies in Italian Syntax*, Emerald, 39-64.

Benincà, Paola (2006) "A Detailed Map of the Left Periphery of Medieval Romance," in R. Zanuttini, H. Campos, E. Herburger, and P. Portner (eds.) *Crosslinguistic Research in Syntax and Semantics: Negation, Tense, and Clausal Architecture*, Georgetown University Press, 53-86.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Biding*, Foris.

Jayaseelan, K. A. (2001) "IP-Internal Topic and Focus Phrases," *Studia Linguistica 55* (*1*), 39-75.

Kuno, Susumu (1976) "Subject Raising," in Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 5*, Academic Press, 17-49.

Kuroda, Sige-Yuki (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," in William J. Poser (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, 103-143.

Miyagawa, Shigeru (1997) "Against optional scrambling," *Linguisitic Inquiry 28*, 1-25.

Niinuma, Fumikazu (2005) "Unaccusativity and Honorification in Japanese," *Gengo Kenkyu 127*, 51-81.

Poletto, Cecilia (2006) "Parallel Phases: a Study on the High and Low Left Periphery of Old Italian," Mara Frascarelli (ed.) *Phases of Interpretation*, 261-292.

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," in Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook in Generative Grammar*, Kluwer, 281-337.

Rizzi, Luigi (2004) "Locality and Left Periphery," in Adriana Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, 223-251.

Takano, Yuji (2003) "Nominative Objects in Japanese Complex Predicate Construction: A Prolepsis Analysis," *Natural Language & Linguistic Theory 21* (*4*), 779-834.

Ueno, Takafumi (2016) "The Diachronic Shift of the Complementizer *che* in Italian: The Finite Complement Sentence of Verbs *sembrare* and *parere*," *Nidaba 45*, 1-10.

Ueno, Takafumi (2017a) "The Diachronic Shift of Complement Clauses in Italian: The Establishment of Complementizers in the Verbs *sembrare* and *parere*," *Nidaba 46*, 15-24.

Ueno, Takafumi (2017b) "The *v*P Periphery and the sCP Layer in the Small Clause of Old Itailan," *Journal of Linguistic and Cultural Studies 48,* 15-32.

青柳宏 (2010)「日本語におけるかき混ぜ規則・主題化と情報構造」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究』開拓社, 193-225.

庵功雄 (2012)『新しい日本語学入門：ことばのしくみを考える 第２版』スリーエーネットワーク.

井上和子（2009）『生成文法と日本語研究：「文文法」と「談話」の接点』大修館書店.

上野貴史（2015）「イタリア語非対格自動詞補文の使用分布と統語構造」,『広島大学大学院文学研究科論集 』第75巻，43-60.

上野貴史（2017）「イタリア語における「*essere* ＋形容詞」非定形補文について：通時的文章コーパスを用いて」,『ロマンス語研究 』第50号，87-96.

尾上圭介（1995）「「は」の意味分化の論理：題目提示と対比」,『月刊言語』Vol. 24，No. 11，28-37.

岸本秀樹（2007）「題目優位言語としての日本語：題目と Wh 疑問詞の階層位置」，長谷川信子編『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』ひつじ書房，25-71.

金水敏（1993）「古典語の「ヲ」について」, 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版，191-224.

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店.

桒原和生（2010）「日本語疑問文における補文標識の選択と CP 領域の構造」，長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究』開拓社，95-127.

小泉保（2007）『日本語の格と文型：結合価理論にもとづく新提案』大修館書店.

寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味（３）：取立て助詞について」,『文藝言語研究 言語篇 ６』，53-67.

富岡諭（2010）「発話行為と対照主題」，長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究』開拓社，301-331.

野田尚志（1995）「文の階層構造からみた主題ととりたて」, 益岡隆志・野田尚志・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版，1-35.

野田尚志（1996）『「は」と「が」』くろしお出版.

長谷川信子（2010）「文の機能と統語構造：日本語統語研究からの貢献」，長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究』開拓社，1-30.

堀川智也（2012）『日本語の「主題」』ひつじ書房.

三上章（1972）『現代語法序説』くろしお出版.

三原健一（1994）『日本語の統語構造』松柏社.

三原健一・平岩健（2006）『新日本語の統語構造：ミニマリストプログラムとその応用』松柏社.

The Syntactic Function of "*Wa*" Phrases and the "*Ga*" Case in Japanese

Contrastive Study of the CP Layer with Italian

Takafumi UENO

Key words: CP Layer, "*Wa*" Phrase, "*Ga*" Case, Scrambling, Italian, Japanese

This paper investigates "*Wa*" phrases related to the complementizer phrase (CP) layer, which indicates the pragmatic function of sentences, and the "*Ga*" case referring to a tense phrase (TP), which shows the propositional meaning of sentences. According to Kuno (1973), the particle "*Wa*" functions in two ways: as a Thematic Topic or a Contrastive Topic, and the "*Ga*" case has three functions: Exhaustive Listing, Neutral Description, and Nominative Object. By examining these syntactic functions, we posit that "*Wa*" phrases have two kinds of movement: inside the TP and toward the CP layer, and "*Ga*" phrases move to Spec TP and the CP layer. On the basis of the refinement of the Japanese CP layer, we clarify the distinction of the CP layer between Japanese and Italian.